

令和3年度
事業報告書

令和3年4月 1日から
令和4年3月31日まで

公益財団法人
タカミヤ・マリバー環境保護財団

はじめに

公益財団法人タカミヤ・マリバー環境保護財団は、令和4年3月31日を持って、当年度諸事業は全て終了しました。

但し、ご承知のように、多くの事業が新型コロナウイルス感染症による影響を受け、中止もしくは事業縮小を余儀なくされました。

特に、当財団の活動は、地域の高齢者や小学校児童が参加しての環境保護活動も多く、人と人の接触が難しい中、経済、医療、教育、環境、福祉等で市民生活にも大きな影響が出ており、認定事業のなかには、計画通り実行できなかったものもあります。

公益目的事業

- I. 河川・海岸の美化推進事業
- II. 水生生物の生態研究及び保護・育成事業及び海域の水産資源保護増殖事業
- III. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあい事業を行う団体に対する助成事業
- IV. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあいに関するシンポジウム・環境教育
- V. 北九州市環境ミュージアムの運営

I. 河川・海岸線の美化推進事業

1. 市民参加による水辺環境美化事業

令和3年度は、財団主催、及び共催により、地域住民や小学校児童など、一般市民も参加しての河川・海岸線美化清掃事業を13回計画いたしましたが、**全て中止**となりました。

2. マリバー号による事業

マリバー号は、当財団が所有する塵芥収集車で街宣設備を有し、乗務員2名により月曜から金曜までの毎日、北九州市内の海岸線、河川へ出動しています。現在のコロナ禍にあっても、従来通り、活動を行いました。

活動の内容は、市民への環境美化の呼び掛け運動、乗務員による清掃、ゴミ収集及び処理、広大な北九州市内海岸部、河川に投棄される不法廃棄物の監視、など、令和3年4月1日から令和4年3月31日にかけて実施致しました内容は以下の報告の通りです。

(1) 事業実施期間

令和3年4月1日～令和4年3月31日

(2) 実施地域（マリバー号巡回地域）

海岸線エリア

ア. 脇田海岸エリア

イ. 響灘エリア

ウ. 戸畑・若松エリア

エ. 日明エリア

オ. 砂津・末広エリア

カ. 太刀浦エリア

キ. 門司港・和布刈エリア

ク. 新門司北エリア

北九州市内河川流域

1 城内川 2 砂津川 3 神嶽川 4 紫川① 5 紫川② 6 小熊野川

7 長行山田川 8 紫川③ 9 立花川 10 井手浦川 11 母原川 12 茶屋川

13 志井川 14 村中川 15 大川 16 羽山川 17 清滝川 18 奥畑川

19 櫛毛川 20 相割川 21 竹馬川 22 朽網川 23 貫川 24 大野川

25 田原川 26 長野川 27 板櫃川 28 天籟寺川 29 撥川 30 割子川

31 建郷川 32 中子川 33 金山川 34 新延川 35 白木川 36 金剛川

37 笹尾川 38 新々堀川 39 金手川 40 江川 41 坂井川 42 寺田川

43 原田川 44 相川 45 熊本川

(3) 事業内容

①北九州市内の海岸線及び河川流域パトロール（海岸線、河川美化清掃・ゴミ持ち帰り啓発）

②水辺環境愛護団体等支援

(4) 活動状況

①北九州市内の海岸線パトロール

マリバー1号により、北九州市域内の海岸線、河川流域を巡回するためのパトロールルート、乗務員の勤務スケジュール策定や巡回頻度の検討を行いました。各エリアにつき月／2回から4回程度の巡回を行うことを、計画・実施いたしました。

②ゴミ不法投棄監視・河川、海岸線護岸等の破損の監視

巡回を行う際に大型ゴミの不法投棄の監視、通報及び海岸線護岸の破損事故の監視、通報を行いました。

③水辺愛護団体等支援

令和3年度は、コロナ禍の為、全て中止となりました。

(5) 成果

ゴミの分別行動に見られるような市民意識の高まりに加え、20年以上に亘ってのマリバー号の実績や認知によって、市民に広く理解をいただき、多くの協力を得られるまでになっています。

II. 水生生物の生態研究及び保護・育成事業及び

海域の水産資源保護・増殖事業

この事業は、紫川の生態系の研究、アユの研究・保護、北九州市内でのメダカ・ホタルの保護及び、北九州市周辺海域の水産資源保護・育成を行う事業です。北九州市の豊かな自然環境の象徴として、小倉南区・小倉北区を流れ、響灘に注ぐ紫川があります。この川は、田園部と都市中心部を縦断しており生態系を考える上でも重要な価値があります。その中で、稚アユ放流につきましては、令和3年度も例年通り実施しました。

但し、多くの児童や地域住民の方々に集まったの実施は、コロナ禍では難しく、関係者及び一部の児童参加で実施致しました。

また、令和3年度は令和2年度に続き、アユの遡上調査を実施しました。

1. アユの生態研究・保護・育成事業

稚アユ放流

4月に恒例となっております「紫川アユ放流祭」は、新型コロナ蔓延の為実施できませんでしたが、福岡県より、ご協力頂いた福岡県産の稚アユ1万尾を放流しました。

水生生物の調査研究事業

令和3年度の水生生物の調査研究事業は、前年度に続き「魚道改良後における稚アユの遡上調査（紫川）」として実施いたしました。

紫川井堰（新日鉄取水堰）においては、平成28年度に日本大学工学部土木工学科安田陽一教授の指導のもと、「遡上しやすい魚道づくり」として右岸側魚道内へ石詰め作業が実施された。今年度は、平成29年度及び令和2年度に続き、その効果の把握のためアユの遡上状況調査を実施しました。

また、片野井堰、伊崎井堰では安田先生による石組魚道創出が行われており、遡上状況の確認のため、定置網による捕獲調査を試験的に実施しました。

2. 調査位置

調査位置を図2-1に示した。

紫川井堰（新日鉄取水堰）では、目視によるアユ遡上数の計測を、片野井堰

及び伊崎井堰では、小型定置網による遡上個体の捕獲調査を実施しました。



図 2-1(1) 調査位置（紫川井堰：遡上目視調査）



図 2-1(2) 調査位置（片野井堰：定置網調査）



図 2-1(3) 調査位置（伊崎井堰：定置網調査）

3. 調査方法

作業状況を図 3-1 に示した。

紫川における天然アユの遡上は、例年 3 月末頃から 6 月下旬頃までと考えられている。過去の調査では遡上のピークは 4 月下旬から 5 月下旬頃であつ

たことから、この期間中に週 3 回の頻度で紫川井堰にて計 15 回の遡上目視調査を実施した。なお、調査期間中に濁水による中断が 4 回発生したため調査を延長しました。

定置網による遡上調査は、片野井堰、伊崎井堰の 2 か所で実施した。石組み魚道を遡上した個体を捕獲するため、堰の上流側に定置網を 1 昼夜設置しました。



図 3-1 作業状況

4. 調査結果

(1) アユの遡上数

遡上数の推移を図 4-1 に示した。

調査期間中に遡上した稚アユ数は 0~243 個体/日の範囲であった。今年度の 4 月の降水量は例年に比べ非常に少なく、4 月 16 日、4 月 23~28 日は魚道に流水はなく、アユは遡上できない期間がみられた。降雨後は順調に遡上しており、遡上できない期間中に汽水域にとどまったアユは、降雨後に一斉に遡上したものと考えられる。なお、今年度は遡上できない期間があり、遡上のピーク時期は不明確となった。

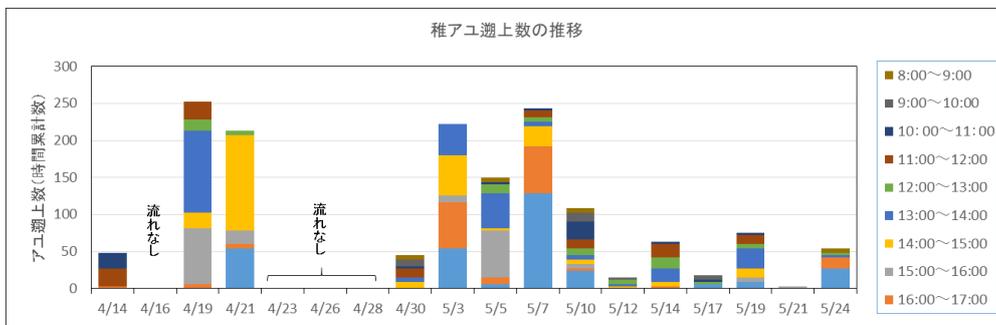


図 4-1 アユの遡上数の推移



(2) 降水量

渇水時の魚道の写真を図 4-2 に、遡上期間中の降水量の推移を図 4-3 に、平年値との比較を図 4-4 に示した。

今年度は遡上調査の開始直後より雨天の日が少なく、魚道は水量不足で流れがない状況の日が多かった。4月の降水量は平年と比べ少なく、5月20日には90mmを越える豪雨が発生するなど、渇水と豪雨など、今年も極端な天候となっていた。



図 4-2 渇水時の魚道（左：魚道内、右：魚道下端）

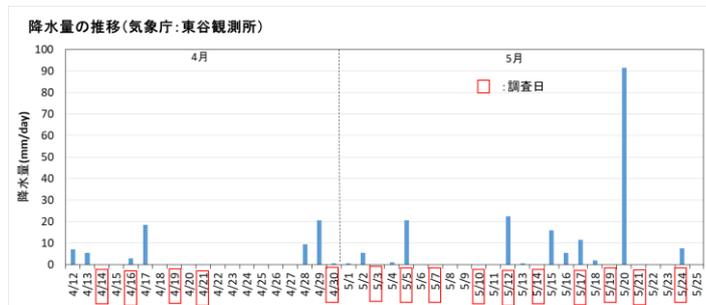


図 4-3 遡上期間中の降水量の推移

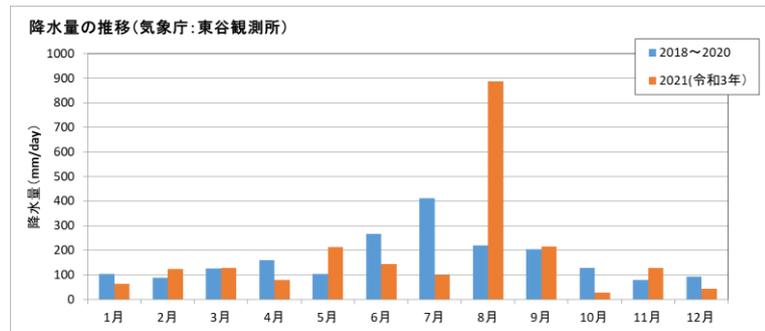


図 4-4 降水量の平年値との比較

(3) 潮汐

傾向として、アユ遡上のピークは、満潮時から下げ潮時にみられることが多かった。これは、昨年度と同様の傾向であった。なお、過年度（平成 29 年度）は、調査回数の約半分は干潮時から上げ潮時に遡上しており、潮汐と遡上数に明確な関連性はみられていません。

(4) 水温

調査期間を通じた水温は、13.9～23.7℃の範囲にあった。水温は魚道上部（淡水域）及び魚道下部（汽水域）ともに早朝に低く、夕方にかけて高くなる傾向にあった。水温とアユの遡上数に顕著な傾向は見えませんでした。

5. 遡上数の推定

アユ遡上個体数の推測を図 5-1 に、過年度との比較を表 5-1 に示した。今年度の遡上調査では、計 15 日間の調査で計 1,296 個体の遡上を確認した。これを基に調査期間中の遡上数の推測を行った。その結果、今年度の調査期間中に紫川に遡上したアユは 2,938 個体となりました。

既存資料との比較では、九州共立大学の日高秀夫助教授が、過去(1998 年)に実施した 1 ヶ月間の連続捕獲調査で 1,392 個体の稚アユが確認されている。また、平成 29 年度に実施した遡上調査では、約 4,900 個体の稚アユの遡上を、令和 2 年度は約 2,600 個体の遡上を確認し、今年度は約 2,900 個体であり、昨年度と同じ程度の遡上数でした。

なお、過年度では、平成 29 年度に遡上数が多いが、アユ放流祭直後に紫川の上流域で 112mm/日の記録的豪雨が発生しており、この洪水により放流祭直後の稚アユの一部は一旦汽水域まで流され、それが再遡上したため遡上数が増加した可能性が考えられます。

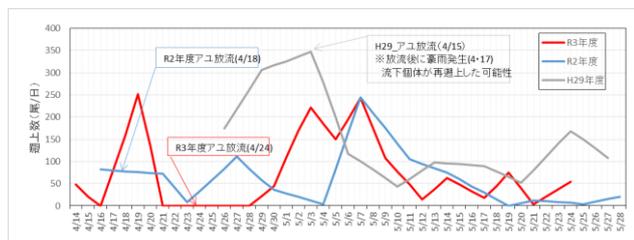


図 5-1 稚アユの推定遡上数

調査		アユ遡上数
既存資料	日高秀夫(1988)※1	1,392 個体 / 総捕獲数
現地調査	平成29年度(過年度)	実測: 1,506 個体(計10日間の実測結果) 推定: 4,900 個体(1ヶ月間の換算値)
	今年度(令和2年度)	実測: 774 個体(計13日間の実測結果) 推定: 2,600 個体(約1ヶ月半の換算値)
	今年度(令和3年度)	実測: 1,296 個体(計14日間の実測結果) 推定: 2,900 個体(約1ヶ月半の換算値)

表 5-1 過年度との比較

※1:九州共立大(日高秀夫;1988) 1ヶ月間のアユ連続捕獲調査結果(講演資料)

6. 石組魚道の遡上状況

定置網による捕獲個体の結果を表 6-1 に示した。

定置網で捕獲された生物は、魚類 3 種、両生類 1 種、軟甲類 1 種の合計 5 種であった。これらの種は石組み魚道を遡上した可能性よりも、堰に下った個体が、堰で U ターンして定置網に入った可能性の方が高いと考えられます。

調査日：令和3年5月25～26日

No.	門名	綱名	目名	科名	和名	片野井堰	伊崎井堰
1	脊椎動物門	硬骨魚綱	コイ目	コイ科	オイカワ	8	40
2					ムギツク	1	2
3					イトモロコ		10
4		両生綱	無尾目	アカガエル科	ウシガエル (幼生)		5
5	節足動物門	軟甲綱	エビ目	ヌマエビ科	ミナミヌマエビ		2
合計	種類数					2種	5種
	個体数					9個体	59個体

表 6-1 定置網による捕獲個体

今回の定置網による捕獲種は、遡上個体と考え難いことや、定置網を設置した片野井堰と伊崎井堰は流量が多く、多少の降雨が発生しただけで定置網が流される危険性があり、すぐに回収できる体制が必要となる。このため、次年度については、遡上の目視とビデオ撮影等の併用などの調査方法を検討します。

Ⅲ. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究・増殖、水辺の青少年とのふれあい事業を行う団体に対する助成事業

当財団では、市民や環境保護団体の皆様と協力しあい、より美しく、自然豊かな北九州市の水辺環境づくりに取組んで行くために「クリーン・マリバー・ネットワーク」運動を提唱しています。一人一人の力だけでなく、また一団体の活動だけでなく、水辺の環境保全を大きなネットワークとして盛り上げていこうという事業です。このため、当財団では環境保全や水生生物保護などに関する PR や、事業活動を積極的に推進する一方、関係団体の活動にも資金援助や協力をさせていただき助成金制度を設けています。

この制度の愛称を“マリバーエイド”と呼び、当財団の趣旨に沿った事業の実施を目的として、活動実績を有し、北九州市に所在を置く任意団体、又は有志の調査・研究グループ（自治会、子供会、学校を含みます。）を対象としております。今年度も 55 団体、56 事業に対し助成を行いました。

1. 令和3年度 分類別助成事業

(1) 河川環境美化・清掃事業及び河川愛護団体との協力、ならびに支援事業

- ①河川 北九州市内の河川 (主として紫川)
- ②区間 北九州市内域の全区間
- ③助成団体 18団体
- ④合計助成金額 1,900,000円
- (2) 水辺の自然と青少年とのふれあい事業
 - ①事業概要 キャンプ教室・釣り大会・その他自然と親しむ水辺でのイベント
 - ②助成団体 13団体
 - ③合計助成金額 1,131,535円
- (3) 水生生物の生態研究並びに保護・育成事業
 - ①習性研究・遡上数調査
 - ②アユの保護・メダカ・ホタル飼育
 - ③助成団体 10団体
 - ④合計助成金額 892,253円
- (4) 河川・海域の水産資源保護・増殖並びに沿岸域の環境美化事業
 - ①北九州市内の稚魚放流 (主としてヒラメ・カサコなど)
 - ②北九州市沿岸域の環境美化・清掃
 - ③助成団体 2団体
 - ④合計助成金額 150,000円
- (5) その他
 - ①環境教育事業
 - ②海岸線緑化他
 - ③助成団体 13団体
 - ④合計助成金額 1,000,000円

総合計 55団体 56事業
5,073,788円

IV. 河川及び海岸線愛護、水生生物の研究増殖

水辺の自然と青少年とのふれあいに関するシンポジウム・環境教育

この事業は、公1、公2、公3の事業内容をより、一般市民へ広めていくために開催するシンポジウム、及び同様の主旨での子供たちへの環境教育活動を行う事業です。

1. シンポジウム

令和3年度は、新型コロナ蔓延の為、開催を見送りました。

2. 環境教育

①今町小学校自然体験教室

令和3年度は、新型コロナ蔓延の為、開催を見送りました。

②大蔵小学校自然体験教室

令和3年度は、新型コロナ蔓延の為、開催を見送りました。

V. 北九州市環境ミュージアムの運営

1 開館及び来館者の状況

1-1 開館の状況

令和3年度の開館日数は230日となりました。(昨年度248日、通常開館の場合313日)。

令和3年度も2年度に引き続き新型コロナウイルス感染予防対策としての緊急事態宣言を受け、5月12日～6月20日及び、8月9日～9月30日の2期間、臨時休館となりました。

上記以外の期間については、通常通り月曜日休館、公立小中学校の長期休暇中は毎日の開館としました。

1-2 来館者の状況

令和3年度は開館日数が令和2年度と比較して18日少なくなったものの、来館者の年度総計は42,873人(前年度比211%)となり、新型コロナウイルス前の状況に徐々に戻りつつあります。昨年度(116団体、4,465人)との比較では増加となっています。

ただし団体の受け入れは、例年のピークである6月に臨時休館となったため145団体、4,769人とコロナ禍以前の令和元年度(407団体、12,823人)と比較すると大幅に減少しており、特に市外からの団体は令和元年度の30%、海外からの団体に至っては2%にとどまっております。

1-3 オンラインでの来館状況

コロナ禍の国内移動・海外渡航の自粛期間において、令和3年度は積極的にオンライン館内ツアーやオンライン講座を受け入れました。また、主催講座をオンラインで発信することにより、国内外に広く環境ミュージアムを紹介することができました。令和3年度のオンラインでのプログラム対応者数は1,002名、YouTubeチャンネルの視聴者数は4,939件となりました。

1-4 イベント実施状況

毎年6月に開催している環境ミュージアムの最大イベント「未来ホテルデー」は休館中であったことから11月に延期し、2日間にわたって開催した。当日は、エコライフステージ2021、東田Share!祭りと連携し、1日目は747人、2日目は1,093人の合計1,840人となり、年間で最大の来館者数となりました。

ちょいエコホリデーは公立小中学校の長期休暇に合わせて8月上旬と3月上旬に実施した。しかしながら新型コロナウイルスの蔓延時期とも重なり、ちょいエコホリデーの参加者は8月と3月を合わせて40名にとどまりました。

以上に加え、毎年実施している市民参加型のイベントについては、延べ25日開催し、参加者は275人でした。この中でドコエコツアーについてはバスツアーとしてエコタウンセンターを訪問、ウォーキングツアーとして「地球の道(鉄の道)」を3月に実施しました。参加者はそれぞれ6人、4人でした。

2 施設設置目的達成に向けた取組

2-1 利用者の増加を図る取組

利用者の拡大を目的に令和2年度から新たにはじめた企画展「企業とSDGs展」と「食×SDGs展」の2事業を引き続き実施しました。また「考えるミュージアム」への転身を試みた今年度の新しい取り組みとして、北九州市の環境政策の最先端を知り、考えてもらう「北九州市環境最前線」と、科学技術の進展がいかにSDGsの達成に貢献できるかを考える「科学技術とSDGs」の2つの連続講座もスタートさせました。

「企業とSDGs展」については北九州市で活動する企業のSDGs達成に向けた取り組みや環境に配慮した取り組みを紹介しました。今年度は花王グループ、日鉄エンジニアリング、九州電力の協力を得てパネル展示や北九州市の環境の取り組みを楽しく知ってもらうゲームコーナーの設置を行いました。

「食とSDGs展」においては、肉を生産するために排出されるCO₂の量や生産に必要な水の量などを解説すると同時に、来館者に食を通じてSDGsを達成するために何ができるのかを考えてもらいました。

また4月下旬から開催されたArt for SDGsの開催に合わせて3館連携企画展「北九州産業都市の軌跡」を実施しました。この企画展ではいのちのたび博物館、鶴屋本店と環境ミュージアムの3施設を展示会場に定め、いのちのたび博物館では北九州地域の歴史、環境ミュージアムでは北九州地域の公害体験から世界の環境首都に至った経緯、旧鶴屋本店では中央町商店街の形成と今についてのパネル展示を行いました。

新規の連続講座である「北九州環境最前線」では、現役の北九州市職員に北九州市が行う環境政策とその現場について詳細に語っていただいた。またもう

一つの新規講座「科学技術と SDGs」については、北九州産業学術推進機構 (FAIS) の各部局の担当者 (産学連携部、DX 推進課、自動車・ものづくり支援センター、ロボットセンター) にそれぞれの分野の動向について SDGs と絡めながらお話しいただき、技術がどのように SDGs 達成に貢献できるかディスカッションを行いました。

これらの連続講座はオンラインでの参加も可能にすると同時に、より気軽に参加してもらうことができるように YouTube でのストリーミング配信にも取り組みました。また YouTube には配信した映像をアーカイブとして残し、より多くの方々に環境ミュージアムの取り組みを知ってもらうように努めました。

2-2 施設の充実への取組

令和 3 年度はオンラインでのプログラムや講座、館内ツアーを積極的に配信した。新型コロナウイルス感染症の蔓延により学校にいながら、自宅にいながらの講座参加や環境学習プログラムへの参加を求める声が多くなった。そのため当館では講座を積極的に配信したり、オンライン館内ガイドの対応を積極的に受け入れたりして、お客様のニーズに応える努力を怠らなかった。

またオンラインにて環境ミュージアムにふれる方々が今後も増えることを予測し、令和 4 年度 4 月からのホームページ・リニューアルを計画し準備を進めた。

2-3 職員能力向上への取組

5 月 12 日～6 月 20 日及び、8 月 9 日～9 月 30 日の臨時休館中には職員研修を実施しました。

前半は主にガイドの対応時に活かすことができる知識を深める研修を実施した。具体的には、1) 環境ミュージアムの「商品」は何か職員間で共通認識を持ち、その「商品」を磨くためには何をすべきかのディスカッション、2) 北九州市の環境政策及び廃棄物処理の歴史、3) 東田の電力の仕組み、4) アフリカを事例に SDGs を考える講義及び、4) 「気づき」を体感するワークショップを実施しました。

後半は職員の企画力向上、事務作業の効率化を目的とした研修を実施した。具体的には外部講師を招いて、1) 環境ミュージアムが持つコンテンツの役割を確認するワークショップ、2) イベントの企画作成講座、3) 広報戦略とマーケティングの手法、4) 効率的なデータ整理と情報共有の方法について研修を行いました。

2-4 営業・広報の取組

令和3年度はウェブ上での広報活動をこれまで以上に強化して実施しました。環境ミュージアムだよりは計画通り年間4回発行し、主に小学生高学年に対する環境ミュージアムの認知度向上に努めました。また、ホームページ及びSNSの更新に加えて、今年度は過去に環境ミュージアムを訪れた方々の連絡先を整理しメーリングリスト（約1000件）を作成した。以上のように環境ミュージアムのイベントや講座の情報をより幅広い人々に届ける仕組みを整えました。

またメディアの露出度の向上にも努めた。市政テレビ「今日の焦点」で環境ミュージアムの役割を紹介したり、JCOMのライブニュースにて未来ホタルデーの告知を行ったりした。そのほかYouTubeのアーカイブとして残る、北九州エコライフステージの動画撮影や、東京パラリンピックの採火式、若松ボートレース場の企画番組にも協力し、YouTube上に環境ミュージアムの映像及び紹介を残すことができました。

3 利用者満足度向上に向けた取り組み

3-1 プログラムの充実

来館団体に回答していただいたアンケートの結果によると概ね満足いただいています。全体を通じて、スタッフの説明がわかりやすかった、親切な対応だったという声が多く聞かれた。小学生対象のプログラムについても、子どもたちが楽しそうだった、子どもの質問に対してもていねいに答えてくれた、クイズなどで子どもが悩んでいるときは声かけをしてくれたなどスタッフの対応がていねいという声が多数ありました。

しかしながら、昨年度に引き続きコロナ禍の影響で、環境学習サポーターが実施する工作がなくて残念等の声も聞かれた。

また中高生のSDGs研修旅行の受け入れ、小学生を対象とした海洋プラスチック問題や再生可能エネルギーの解説をして欲しいという要望が増えていることから、休館期間を活用してプログラムの充実のための方策等を話し合う時間を設けたと同時に、SDGsマップづくり、海洋プラスチック問題と再生可能エネルギーをていねいに解説する講義プログラムを開発しました。

3-2 イベントの充実

令和3年度のイベントはコロナ禍の影響で中止、延期せざるを得ないケースが生じた。毎年恒例の未来ホタルデーは当初例年通り6月の実施を計画していましたが、延期がくりかえされなんとか11月末に開催することができた。6月で開催準備を進めていただいていた環境活動団体のみなさまにはご理解をいただき11月に積極的参加していただくことができました。1日目は747人、2日

目は1,093人の合計1,840人となり盛況なイベントとなりました。

ドコエコバスツアーは、北九州市の環境政策を再確認するという意味も込めてバスツアーでは北九州エコタウンセンター、ウォーキングツアーでは地球の道を実施しました。

令和3年度からの新たな取組として、新たに北九州市の環境の取組を知り考える「北九州市環境最前線」と科学技術の進展がいかに関SDGsの達成に貢献できるかを考える「科学技術とSDGs」の2つの連続講座もスタートし、さらにこれらの講座内容をオンラインで同時発信し、そのままオンライン上にアーカイブとして残すという取り組みをおこないました。結果としては来館して聴講する方々は新型コロナウイルスの影響もあり少なかつたものの、オンラインでの視聴者数はそれなりに手応えを得る参加者数となりました。またアーカイブに残された動画については日を追うごとに視聴者数が増えるという結果になった。これらの連続講座の実施とオンライン配信は、4年度以降も実施、拡大し、オンライン環境ミュージアムの定着を目指していくこととしています。

3-3 新たな施設の活用

新型コロナウイルスの影響を受けて外出を自粛する動きが増えるなか、オンラインでの来館者を増やす試みを行いました。これまで環境ミュージアムのYouTubeチャンネルには、スタッフが撮影、編集した環境学習動画を掲載してきました。令和3年度は新たな試みとして環境ミュージアムが主催した講座の様子をアーカイブするために活用しました。

4 指定管理業務に係る費用、収支の増加に向けた創意工夫

イベントを実施する際のポスター、チラシ、ウェブ上に掲載するバナーなどはスタッフが作成するなどして経費削減に努めました。

収入については出張ミュージアム及びオンライン講座を積極的に受け、収入の確保に努め、コロナ禍においてミュージアムショップの活動は控えていたが、10月1日から業務を再開し、ショップでとりあつかう商品をウェブで紹介するなど、告知につとめました。

5 管理運営体制等

令和2年度に引き続き、より効率的な運営体制について、スタッフの皆が参加しての協議を進めました。具体的には週ごとの運営状況の把握と戦略、業務の効率化、企画における予算管理体制、スタッフからの提案体制の確立、プログラムの発展に向けたスタッフミーティングの充実化、スタッフ間の情報共有の仕組みの整備を行いました、4年度に向けた業務の効率化と発展の基盤を作り

上げることができました。

6 施設管理の状況

施設管理においてはきめ細かな確認と管理を行った。特に衛生面（清掃作業及び館内の消毒作業）と安全面（AEDの確認業務）についてはスタッフと協力会社による毎日の清掃と安全確認作業を実施した。そのほか、簡易な機材、機械関係の定期的な確認はスタッフがを行い、専門知識を要する確認については協力会社が行った。施設または設備に異常が確認された場合は速やかに環境学習課に報告し、対応方法を検討すると同時に、可能な限りスタッフによる応急措置、修繕措置を行いました。

7 安全危機管理体制

点検は、これまでと変わらず日常的にきめ細かく実施し事故の未然防止に努めました。

また、職員の緊急連絡体制もスタッフの変更があれば迅速に再整備し、台風、大雪などの事象の際には連絡・報告・指示ができる体制を整えてきました。

3年度についても引き続き新型コロナウイルス感染予防対策を実施してきた。その都度の北九州市の方針を遵守するとともに、入館受入れの際の検温・消毒、ガイド時におけるマスク、マウスシールド、ゴーグルの着用を実施するとともに、イベント等におけるソーシャルディスタンスの確保、展示物や備品、トイレの定期的な消毒を行いました。

1月末にはスタッフ1名の新型コロナウイルスの感染の疑いが確認されたものの、初期の段階での隔離及び自宅待機を指示することによって、来客者及びスタッフに感染が及ぶことはありませんでした。また、自宅待機中のスタッフの業務については日常的な情報共有体制が功を奏し、大きな混乱につながることはありませんでした。